第３章

言葉が出てこなくても
言いたいことを簡単に伝えるコツ

このシチュエーションは、生徒さんにとって何よりも悔しいです。

英語で言いたいことがたくさんあります。
なのでブログを読んだり、動画を見たり、ポッドキャストを聞いたりして
1日中あっちこっちで英語を学んだりします。

道案内、チェック！
挨拶、チェック！
ネイティブがよく使うフレーズ、チェック！

それで早速、外国人と英語で会話をしようとしたら・・・
頭が真っ白
今までしっかり勉強してきた単語が全く出てきません。

なんとなく片言で、会話をできる限り続けようとしているのですが、学んだ単語が全く使えないままです。言いたいことがあるのに、どうしても伝えられないのです。
しかも、会話が終わった瞬間に、なぜか今まで忘れていた英語をちゃんと思い出します。

本当に、悔しいと思いませんか？

でもこんなシチュエーションってよくあるはずです。

単語をたくさん学ぶ必要がない理由

正直に言うと、コミュニケーションのために英単語をたくさん覚える必要はありません。
あなたは５歳の頃、日本語の単語をあまり知らなかったのに、ちゃんとコミュニケーションが取れていました。それってなぜでしょうか？

単語とは、複雑なイメージや感覚をまとめて省略しただけなのです。

「コーヒー」や「靴」という言葉は一見簡単に思うかもしれませんが、実際は複雑なイメージを伝えている言葉です。

「挽いたコーヒー豆にお湯を通して抽出した液体」の代わりに「コーヒー」と言います。
「快適に歩くために足に履く物」の代わりに「靴」と言います。

単語１つずつ、一見どんなに簡単に見えても、特定なイメージや感覚を表現しています。
このイメージと感覚を「コトバの本質」と僕は呼んでいます。

日本語の英訳が分からなくても、「単語」ではなくその単語の「コトバの本質」を伝えようとすれば、相手はきっと分かってくれます。

英訳のない日本語にもぴったり

英語には直接翻訳できない日本語もたくさんあります。
例えば「懐かしい」「恋しい」「空気を読む」などなど、本当にたくさんあります。

この直訳のない言葉を英語ではどうやって伝えるのでしょうか？

相手は「read the air（空気を読む）」という直訳は分からないかもしれませんが、「They don't tell you, but you understand the people's feelings.（言葉で伝えなくても、理解できる気持ちや感覚）」というコトバの本質であればわかるはずです。

必要な情報は既に分かっているはず

単語をひと目見て「コトバの本質を説明する」ということはとても難しく感じるかもしれません。でもあなたはきっと、その説明のために必要な英語の文法や単語を学校で学んだことがあるはずです。

「中学校の英語を卒業する」必要はありません。逆に、説明が簡単になればなるほど、相手にとってはわかりやすくなります。

新しい単語を学ぶ必要はありません。コミュニケーションを取るために必要なこと全てを、あなたは既に分かっているのです。

単語が出てこなくても、「コトバの本質」を説明して言いたいことを何でも伝える方法

イメージや感覚を想像する

まずは、言いたいことの英訳が分からないとき、言いたいことのイメージや感覚を想像します。

例として、「懐かしい」という英訳のない単語を英語で説明しましょう。
説明するときに、まず視野を広げ、その後だんだん絞っていきます。

では最初に、言いたいことの「種類」を考えましょう。

「懐かしい」というのは気持ちですから、「feeling」にしましょう。
それから、「懐かしい」によく伴う気持ちを想像していきます。

懐かしくなったとき・・・
過去を思い出す。
嬉しくなる。
過去に戻りたい。
相手に伝えたい。

これらは、「懐かしい」のコトバの本質です。１つずつ英語で説明していきます。

相手に言いたいことの種類を言う

先ほど「懐かしい」は「feeling」と決めたので、相手にこう言います。

（音声）3-1
「The feeling that...」

フレーズの解説

「the」は、特定のことを指します。「懐かしい」という気持ちは唯一ですから「the」にします。相手に「特定なことを伝えるから聞いてね」という意味も伝わります。

「feeling」は、感情を示す言葉の種類です。物理的なものの場合は「thing」を使います。人物の場合は「person」などになります。

「that」は形容詞となる長い文章の接続詞です。この言葉は日本語に存在しないので説明が難しいですが、以下に「that」の例文をあげてみます。

（音声） 3-2, 3-3, 3-4
This is the person that I met yesterday.」
こちらは、昨日会った方です。

「The book that was in the bookshelf was old.」
本棚に置いてある本は古かったです。

「This is the watch that my father owned.」
これはお父さんが持っていた時計です。

このように、「that」を伴うことで「種類」を説明する文章ができます。先ほどの「懐かしい」を説明するフレーズを英語にして、「that」の後につなげるだけです。

（音声）3-5, 3-6, 3-7, 3-8
過去を思い出す。→「you remember the past」

嬉しくなる。→「you get happy」

過去に戻りたい。→「you want to go back to the past」

相手に伝えたい。→「you want to tell your friend.」

ポイント：一般的な行動を意味する「you」の使い方

このフレーズに出てくる「you」は「あなた」という意味ではありません。人間の一般的な行動を表現するときは、主語が「you」になるのです。

（音声）3-9, 3-10

日本では、箸で食べます。
「In Japan, you eat with chopsticks」

アメリカでは、道路の右側を運転します。
「In America, you drive on the right side of the road.」

この「you」は「一般的に人はこうする」という意味です。

まとめてみましょう

では、「懐かしい」と言いたいのに、その英単語が出てこないとき、以下のようにわかりやすく説明してみましょう。

（音声）3-11

The feeling that
you remember the past,
you get happy,
you want to go back to the past,
you want to tell your friend.

この文章は長いですが、構成している説明部分はそれぞれが短く、単語も中学校の頃学んだレベルです。

でもこれであれば、アメリカ人ならだれでも「懐かしい」の意味を分かってくれるはずです。相手がわかってくれるまで、イメージや感覚を中学レベルの単語で説明しましょう。

ポイント：特徴を伝えるとき

「懐かしい」の例では、「you remember ~, you get ~, you want to ~」など人がよくとる行動を説明した文章ばかりでした。でも物理的な物の場合、人の行動だけではなく「その物の特徴」も説明します。では、どう言えばいいのでしょうか？

「that」の後に、単に動詞を使って特徴を伝えます。

（音声）3-12, 3-13

例えば：

コカ・コーラ→「The drink that is black. It has a sweet taste.」

晴れの日→ 「The day that has no rain.」

会話で使う方法

この「コトバの本質を伝えるコツ」はとても便利ですが、会話中にいきなり言葉を説明しだしたら不自然です。ではどうやって会話の中で自然に使うのでしょうか？

意外と簡単です。言葉を説明する前に単に「Do you know…」と言っておきます。

（音声）3-14, 3-15

A: How do you feel?
B: I feel… Do you know the feeling that (気持ちの説明)

A: Where did you go today?
B: Today I went to… Do you know the place that (場所の説明）。

これで、あなたは単語が思いつかなくても問題なく言いたいことを伝えることができます！

第４章を読む前に・・・

①このセクションのビデオレッスンを観てください。

②Speed Speakingレッスンを受けてください。

③例文集を参考にしながら、復習シートを完成させてください。

上級の英語文章構成

このコツを使うことで、あなたの英語はアメリカ人の誰にでも分かるようになります。でも正直に言うと、このコツだけに従っても、文法的に間違っている文章になる場合があります。
でも、それを気にしてはいけません。

重要ポイント：英語を完璧に話さなくてもいい

日本の英語教育の目的は「完璧な英文をつくる」ということでした。そのため、「英語を間違えちゃだめ」「完璧に話せないと意味がない」と思っている日本人が非常に多くいます。

でも、それはコミュニケーションではありません。

英語を完璧に話そうとすると逆に、コミュニケーションがとれなくなるのです。英語を間違えないよう、完璧な文章を長い時間かけて頭の中で構成している間に、会話の流れが途切れ途切れになってしまいます。その結果、会話がお互いにつまらなくなり、うまく続けられなくなるのです。

コミュニケーションは「自分のメッセージを相手に伝えること」です。なので、文法的な間違いがあっても、違う単語を使っても、言いたいことが通じているならコミュニケーションは取れています。

ポイントは、完璧に話すことではなく、「会話を自然に続けること」です。

今から紹介する文章構成のコツはおまけなので、実際に必要ではありません。もしこのコツがスムーズに使えないようであれば、使うのをやめてください。

「that」を言葉の種類に合わせる

「that」とは文法用語でいうと関係代名詞です。ただ、関係代名詞は複数存在します。
「that」は間違えてもあまり違和感がない関係代名詞なので、今までそれだけをお勧めしてきましたが、実は名詞に合わせて関係代名詞を変える方が本当はより自然なのです。

注意！

ネイティブでさえ関係代名詞を間違えることがあるので、もし間違えたとしても気にしないでください。

以下は、すべての関係代名詞と正しい使い方です。

「thing」→「that」

「Natto is the thing that I ate for breakfast.」
（納豆は私が朝ごはんで食べた物です）

「person」→「who」

「Fred is the person who works at the company.」
（フレッドはその会社で働いている人です）

ポイント：目的語の「whom」という関係代名詞もあります。しかし話すときにあまり使われなくなり、丁寧な文章だけに使われます。

「place」→「where」
「Japan is the place where I live.」
（日本は私が住んでいる場所です）

「time」→「when」
「This is the time when the sakura bloom」
（今は桜の咲く季節です）

「the （名詞）（関係代名詞）」→「（関係代名詞）」

アメリカ人は普段話すときになるべく短い文章を使います。なので「関係代名詞」だけを言うことも多くあります。

「the thing that」→「what」
「Natto is the thing that I ate for breakfast.」
「Natto is what I ate for breakfast.」

「the person who」→「who」
「Fred is the person who works at the company.」
「Fred is who works at the company.」

「the place where」→「where」
「Japan is the place where I live.」
「Japan is where I live.」

「the time when」→「when」
「This is the time when the sakura bloom」
「This is when the sakura bloom」

繰り返します。この上級文法のコツは、あくまでもおまけです。使わなくても会話をとても自然に感じるようであれば使う必要はありません。もしスムーズに使えなかったとしたら、簡単な「that」だけを使うのがおすすめです。